

| | |
|-----|---|
| 標 題 | 学校給食の未来を考えるワークショップを開催 ～隠岐の子供たちに給食で地元の野菜を食べてもらうために～ |
|-----|---|

(ダイジェスト)

2月6日に、学校給食を中心に出荷している農家やJAの担当者を交え、学校給食野菜の町内産使用率向上と新たな生産者の掘り起こしを目的とした、ワークショップを開催しました。ワークショップでは、参加者同士が交流し、コミュニケーションが活発になる中で、意見を出し合うことができ、良い会になったと感じています。
 今後、出されたアイデアをまとめて共有し、これからの普及活動につなげていきます。

隠岐の島町で流通する青果物は、ほとんどが島外から供給されていますが、町内にある量販店等からの需要は高い状況です。給食センター栄養士も同様に島内産野菜を強く求めていることから、まずは、学校給食向け野菜の生産拡大を目指し、次に、量販店出荷へつながるよう活動を行っているところです。そこで、この度、学校給食向け野菜にスポットを当て、町内産野菜の使用率向上と新たな生産者の掘り起こしを目的に、ワークショップを開催しました。

ワークショップでは、「隠岐の子供たちに地元の食材を食べてもらうためにできること」をテーマとし、給食野菜を中心に出荷している農家が5名、JA担当者が1名、普及からは3名が参加し2グループに分かれてアイデアを出し合いました。

最初に、「作る」、「使う」、「食べる」の3つの視点でアイデア出しを行いました。初めこそ意見が出にくかったものの、普及がファシリテーターとして、「柔軟な発想で考えてみてください」とアドバイスを行うなど、アイデア出しのきっかけ作りをしたことで、参加者から多くの意見を引き出せました。また、グループ内での会話や雑談の中から良いアイデアが出るなど、ワークショップのメリットを感じました。その後、3つの視点で出たアイデアを「やり易い」から「難しい」までに整理した後、他のグループへ話し合った内容を説明し、情報共有を行いました。違うグループのアイデアを聞いた生産者からは、「これなら直ぐ出来るんじゃない？」といったポジティブな発言も聞かれ、給食出荷メンバーが一丸となって学校給食の未来を考えていく意識がより強くなりました。また、「月1回情報交換の場が欲しい」といったように、生産者同士の交流を求める声も多く聞かれ、生産者が集まる場を増やす必要があると感じました。

今後、ワークショップで得られたアイデアをまとめ、生産者、関係機関で共有し、まずは「やり易い」とされた意見を積極的に普及活動に取り入れていきます。「難しい」とされた意見についても、誰が中心となってやるべき事か、生産者、関係機関で役割分担を行い実現に近づけるように検討する必要があると感じています。引き続き、隠岐の島町学校給食野菜の町内産使用率向上に向け、給食センター栄養士とJAとの月例会や出荷目合わせ会など、様々な活動を展開していきます。

